

雑司が谷遺跡の発掘調査

雑司が谷遺跡は、主に江戸時代に鬼子母神堂門前の参道沿いを賑わした料理屋・茶屋などが広がっていた地域であることに特徴があります。これまでの発掘調査の成果によって、全国的にも珍しい江戸時代の料理屋・茶屋の実像が明らかになってきています。

昨年から実施してきましたこの敷地内（豊島区雑司が谷3-19-8）の発掘調査では、建物の柱跡や礎石が見つかっています。参道沿いに建てられていたお店のすぐ裏手において、生ゴミを棄てた土坑が見つかり、鯛などの魚の骨からアワビ・サザエの貝類が出土しました。

参道から離れた一番奥側のエリアより、たくさんの陶磁器が棄ててあったゴミ穴が見つかっていることから、ゴミ捨て場であったと思われます。また地下室（ちかむろ）なども確認されています。陶磁器類は、主に有田焼の大皿や小皿・蕎麦猪口、瀬戸・美濃地方産の徳利やお碗などが数多く出土しています。こうした発掘調査の成果から確かにここが料理屋であったということが分かり、また大量の陶磁器が当時の賑わいを物語っています。



江戸時代の鬼子母神堂と参道沿いに軒を連ねる門前町屋。
 ○が調査地点と想定されます。（『江戸名所図会』より）



出土した青磁染付皿 揃い（セット）になります。他にも多くの揃いの器が出土しています。

歌川広重が描いた『江戸高名会亭尽』に登場する江戸時代後期の鬼子母神堂参道の様子

出土した食膳具の一部 碗、皿、蕎麦猪口、徳利など





義歯（入歯）の出土状況。料理屋のゴミ穴から出土しました。店の人のもの？お客さんの忘れ物？



江戸時代後期の料理屋の生ゴミ跡。大量の魚骨や貝がすてられていました。



江戸時代の義歯（入歯）。めったに出土するものではないので、とても珍しいです。



魚のひれの部分。こういった魚の料理が出されていたのでしょうか。料理の復元までを視野に入れなくてはなりません。



金属製灯火具（江戸時代後半頃）
の出土状況。地下室より出土。



江戸時代後期の料理屋ゴミ穴。調査区内にはおさまりきらないほどの大きなゴミ穴です。



行灯（参考資料）



金属製の灯火具。実物大。あかりを灯す台として、行灯（あんどん）内に設置されていたようです。あまり壊れておらず、とても貴重な遺物です。残念ながら行灯は出土していません。



江戸時代後期の料理屋ゴミ穴に廃棄された陶磁器